

## 危険な釣り

三浦 福助

昔々は日本の至るところに化け物、妖怪が沢山いたようです。それらの化け物は自分たちの縄張りを守っていたようですが、人間様との接点では色々といざこざがあり、人間様に害を与えたり、与えられたりしながら共存していました。さて、図-1 をご覧下さい。これは、江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎描くところの「河童を釣るの絵」という漫画です。



図-1 河童を釣るの絵

川辺で禪一丁の親父がお尻を突き出していて、これを川の中にいる河童がキョロッと見上げています。知る人ぞ知る、河童は人のお尻の中にある「尻子玉」

というのが大好物だそうで、この河童の頭の中は、既に旨そうな尻子玉で一杯、飛び上がって食らい付くことしかない様子です。しかし、親父の周りには網を幾重にも張り巡らし、河童が親父の尻に手を伸ばしたとき、網が河童をからめとる何か怪しげな仕掛けがしてあります。

そうです、これが河童を漁獲する方法なのです。釣針も無く、網に無い独創的な漁法ですが、他に類例が無いわけではありません。南洋のトンガ島のサメ漁に似た漁法があります。5,6人の男がカヌーに乗って行うのですが、ココヤシの実を二つに割ったものを20個ばかり藤の輪に通したガラガラを持っていきます。漁場に着くと漁師は呪文を唱えながら、このガラガラを水に沈めて振り動かします。すると、ココヤシの実が互いに当る音と水の音でサメが寄ってくるのだそうです。サメが近づいてくると、やしの繊維で作った網を輪にして海中に沈め、魚肉などを撒いて、サメがその輪に頭を突っ込むように誘導します。サメが輪に頭を突っ込むと、輪を絞ってサメを縛ります。後はカヌーに引き上げるといふ段取りです。

この図からだけでは、仕掛けの具体的な構成は分かりませんが、おそらく同じような趣向だと思います。釣針こそ使いませんが、釣の一種でしょう。古今東西、色々な釣がありますが、珍しい釣の5本の指に入るでしょう。太公望のように釣針無しで1国を釣り上げたという例もありますが、釣道の見地からすれば、彼は邪、是は正と断言できます。自分の尻子玉を餌にして河童を釣ろうとしている親父の顔を見て下さい。煙管をくわえ、まことに能天気、自分の生命の危険などはどこ吹く風と、捕らぬ狸の皮算用を決め込んでいます。釣りをする人は、まことにこのようであればなりません。愚生も聖賢の道を慕って釣りを嗜みますが、この親父の境地には到底達しません。ますますの研鑽が必要だと痛感させられます。

しかし、河童を釣るためなら、何も命を危険にさらすことも無く好物とされる胡瓜を餌にすればよいじゃないかとも思います。今も”カッパ巻”と名を残すくらいですから、延縄式にすれば大量に捕獲で出来るではないでしょうか。だけれど、この程度のことはこの親父のことですから既にやってみたに違いありません。それで駄目なので、河童が我を忘れるほどの好物である「尻子玉」を餌にしているのでしょう。こういった化け物は、変な弱点があり、狂言の「釣狐」などのように油揚げに狂い、捕まってしまう狐などの例もあります。

ところでこの親父は河童を釣ってどうする心算だったのでしょうか。狐なら毛皮、狸なら狸汁と利用の方法はありますが、河童では利用できる部分は無さそうです。頭上のお皿は珍しいものですが、桶の替わりにもなりません。しかし、立派な利用方法があるのです。しかもこの親父なら考えそうな素晴らしい方法です。今から170年ほど前の江戸、京都、大阪の町の様子を記録した近世

風俗志(ほぼ同時代です)に面白い記事があります。道端で生業を立てている雑業の中に猿回し、鳥追いなどと並んで河童の見世物があるそうです。

河童に扮す 同三都にあり。一夫裸にて顔に鍋墨をぬり、腰に縄を付けて、一夫これを持ちて「江戸は浅草、京都は四条川原、大阪は天満天神社内におきまして、御評判に預かりましたる、紀州熊野浦で生捕りました、がたろでござい」。顔に墨ぬる夫、舌を振りて「からゝらゝ」と云うなり。

注 \* 三都:江戸、京都、大阪

\* がたろ、河童の別名

これです!!。この親父はこれを目指して、日本全国を巡業して廻ろうとしているのではないのでしょうか。本物の河童なら、どこに行っても大人気となり、すごい儲けにもなるはずです。実は、愚生も一昨年に奥多摩湖で「オクタマッシー」という巨大怪獣の片鱗を垣間見て撮影したのですが、このとき、恥ずかしながら先ず頭に浮かんだのは同じようなことです。似たような話で実現した例があります。昭和2年に東京湾口、神奈川県久里浜でマッコウ鯨が8頭も浜に打ちあがりました。巨大な鯨で漁師たちは困ったのですが、衆議一決、見世物にしようということになり、浜に並べました。すると、見物人が来るわ、来るわ、何千人にもなり、大変潤ったそうです。最後は捕鯨会社に頼み、油を採ったそうですが、黒船来航以来の騒ぎだったのだそうです。

文明開化とともに、河童は住処を失い、近頃は噂も聞きません。漁具資材は進歩して、釣具も昔では想像できないほど良いものが出回っています。そして職漁のみならず遊漁の人も効率だけを求めて海、川に出掛けるようになりました。大きな魚を沢山、と云うのが釣の基本であることはそのとおりですが、河童釣の親父の顔を見ていると、それだけでは無いことが分かります。

(平成20年7月30日)

以下の写真は東京海洋大学の有元貴文教授がこのホームページを見て、柳田邦男氏の遠野物語の遠野で入手されたもの。

NHKのスイッチを何気なく入れたところ、アサドラの「どんと晴れ」の総集編を放映していた。これに遠野の此れと同じような写真が出て来るので驚いた。如何にも河童が出て来るような風景である。

